

長期震災復興論

——時間、記憶、死者——

花田 太平

はじめに

麗澤大学の花田と申します。内尾先生、示唆に富むお話をありがとうございます。毎日会って議論をしている同僚の話をこういった形で聴くのは大変いい刺激になります。あらためて震災というものの全体像が見えたと感じました。と同時に、内尾先生の名著『復興と尊厳』がひらいたパラダイムともいえるべき地平は時間がたつほど重要度を増してくると、あらためて感じた次第です。

じつは私のフィールドワークの師匠というのには隣にいる内尾先生でして、先ほどお話にあった南三陸で手ほどきを受けて、一緒にいろいろ見てまわりました。私の専門は思想史、しかも西洋政治思想史ということで、見る人が見れば門外漢かもしれません。自分なりの危機意識からこの震災研究に入ったわけで

ですが、ではどのような貢献ができるのか、逆にできないのかというのをふまえて、今回焦点を当てたいのは復興過程が長期間にわたること何が起こっているか、ということ。 「長期震災復興」とタイトルに掲げましたけど、震災の復興期間を仮に「一〇年」としますと、八年目の現在は「後期」にあたります。そういうところで立ち現れる問題、いわゆる「記憶の風化」であるとか、有名な寺田寅彦の「地震は忘れたところにやってくる」に言われている次の自然災害への備えのあり方などがあります。昨夜も地震がありましたけど、記憶の風化というものの根にある問題を掘り出して、この東日本大震災が私たちにもたらしたレッスンを概念として学問的に抽出できないか試みます。二五分という時間のなかですので、エッセンスの部分だけをまずお話しして、あとの三人のディスカッションにつなげて

いければ幸いです。

「長期の時間」

私はとくに死者というものに注目して二〇一七年に震災論（花田二〇一七）を書き、その論文の最後で以下の課題を提示しました。

実践的な復興論の基底となるのが新たな「時間論」であろう。金菱清が観察するように「人知を超えるような大災害も、時間が経過するにたがって現実の生活に回収されはじめる「…」。「長期の時間」は、自然災害を避けがたい人間の生き方の条件として前景化する。（五四頁）

つまり、時間軸を長くとするということは地震がかならずやってくるということを知ることです。しかも定期的になやってくる。この国土のリアリティを、従来の日本人の生き方や生活世界はくみ入れた形をしていました。でも、歯車がちょっと狂いだしたのはやはり戦後からです。とくに神戸の震災以降に構想された「震災復興」という短期集中型の「回復の語り」は新しい現象であるといえます。はたして私たちは近代以前の「長期の時間」を忘れてしまったのだろうか。ひるがえって、では「長期の時間」に立つということはどういうことか。あるいは

「長期の時間」を復興主体として構想するということはどういうことか、と言い換えてもいいかもしれません。それは生命体にとって「終わり」は不可避ということであり、自らの死を内部分化し、私たちの傷ついた自然観を回復させることではないか。以上が私からの問題提起です。

「長期の時間」については、歴史家であるフェルナン・ブローデルはこんなことを言っています。

深層を流れる歴史の方向に逆らおうとすると、どんな努力も「…」失敗する運命にあるのだ。「…」最終的に勝ちを収めるのは、つねに長期の時間である。「…」歴史家は、生活のなかで最も具体的で、最も日常的で、最も不滅であるもの、最も匿名の人間に関わるもの、そのような生の源泉そのものへと向かっていくのである。（ブローデル、一九四頁）

この「長期の時間」と「震災復興」を架橋するための概念構築を試みたいと思います。

概念の整理という仕事

背景にある問題意識としては、人文社会科学はこういった災害復興へどのような「貢献」ができるかということがありま

す。私の専門の思想史では、「概念の整理」という仕事が多くに言えるかもしれません。

加えて、現在聞こえてくるさまざまな政策上の批判、巨大防潮堤の是非や復興が遅れているという部分の根にある政治過程のモデルを再検証する必要があるのではないか。社会学者の山下祐介氏は「この災害復興は失敗である」と言っています。なぜか。彼は、被災沿岸部でその背後に住む人がほとんどいない巨大防潮堤が延々と築かれていることに顕著なように、「復興事業が——正確には復興の前提となる防災事業が——復興の大きな障害になってしまった」（山下二〇一七、二二三—二四頁）と述べています。復興事業そのものが復興プロセスにたいして障害になってしまふ、という問題は、単に政策上の人的な失敗として片づけてよい性質のものではありません。むしろ、復興という政治過程に参加する官民の人びとが、政策立案の前提としていた諸概念（人間観、社会観、死生観等）が、震災であらわになった現実にたいして使い物にならなくなったと考えられるからです。

いま「災後」の話をしているわけですが、そもそも私たちの「戦後」という時代は大戦争から始まったわけですね。事例を超えた概念として抽出することによって、もしかしたらそういういったより根深い議論へと接続できるような概念が生み出せるのではないか。東日本大震災のふりかえりをきっかけに、も

しかしたら近代化のモデル、冷戦集結後野放しにされた資本主義やグローバル化であるとか、ポスト世俗化の議論、すなわち宗教の公的な役割というものが今見直されていますけれども、そういう部分にも問い直しができるのではないか。そのように、「震災論」という固有なコンテキストの成果を、より一般的な現代社会論のなかに埋め込む作業を今後していけたらと思っています。

今日はその一例として「記憶」「死者」「時間」という概念を、より一般的な議論のなかでどうしたら役に立つようにできるかということを検証してみます。たとえば「記憶」の場合では、記憶とは「痛みの記憶／痛む記憶」として再検証できないか。「死者」の場合は、死者というものを「ともに生きる他者」として書き換えることができないか。「時間」に関しても、先ほど言ったように「長期の時間」を新たな復興主体として構想できないかということを試みます。とくに今回は「記憶」と「死者」のところが重要になってきて、「時間」の部分はその結果として立ち現れるという感じになります。

その後の風景

次に、概念についてですが、最近話題の哲学者マルクス・ガブリエルがこんなこと言っていました。

哲学とは、概念についての反省的な思考だとも言えます。／では、概念を扱う哲学がなぜ役に立つのか。私たちの社会が、概念の問題を抱えているからです。現代において、私たちが思考する際に用いている概念の多くは誤りの多い欠陥品で、あちこちに論理的な間違いがある。それは許容できるレベルのものではありません。／正しい概念をもたずして、現実の問題が何なのかを見てとることなど不可能です。概念が間違っていたら、人種差別や不平等、民主主義の危機や資本主義の暴走といった現実的な問題の解決に向けた取り組みを始めることなどできません。現代が困難な時代である理由の一つは、ここににあります。(ガブリエル 二〇一九、一三四頁)

これと同じことが、今回の震災の復興過程でも起こっていたのではないだろうか。地域の再生を語るうえで私たちが多用する、「震災」とか、「被災地」とか、「被災者」とかいう言葉が被災のリアリティを捉えきれずに的を外しているからこそ、その概念に基づいた災害支援のあり方がどんどんずれていく。そういうことが起きていたのではないか。

では実際に、その「被災者」の、当事者の言葉というものをあらためて聴いてみたいと思います。いずれも震災直後の言葉ではなく、時間が経過した「その後」の言葉を読んでみます。

これは仙台市の被災女性の手記です。

家や物や家族を失って、生きる希望までなくしそのまま死んでいった人は多い。津波や火災はくぐり抜けたのに寢床もなくて凍死した人、自殺した人、東北は悲惨な絶望と失意の吹きだまりになっていた。「…」今でも、被災地に新しくできた道路や建物の話題を聞くと、良かったなあと思う前に、気持ちが冷える瞬間がある。日常の喜びや楽しみの手前にも、必ず、寂しさや悲しみが横たわっていて、たぶんそれはまだしばらく消えない。(金菱編二〇一七、二〇五頁)

次の証言は当時中学生だった石巻市の女性の手紙です。

六年前のことを整理する前に、その次へ次へ進もうとしてしまつて、結局なにも受け入れられていません。どうして私たちがこんなめにあつたのか。／震災で亡くなつてしまつたひとや、壊されてしまつた思い出の風景を思い出すだけで、どこにいても、喉の奥がぎゅつと締め付けられます。／どこにいても、消えなかつた私の、心の中の風景は、死んでしまいました。「…」あの日に消えてしまつたたくさんの思い出は、／歳を重ねるたびに曖昧になつてゆ

きます。(同、一六一頁)

この「心の中の風景」というのはとても象徴的だと思いません。目の前の物質的な復旧を喜ぶ一方で、自分のなかにある「心の中の風景」というもの、つまりそのなかにかつて生きていた亡き人びとも含まれるのですが、その間で引き裂かれて、どうにも言葉にできない気持ちがある。それは、文字通り、〈かけがえのないもの〉がもつ悲劇性ということだと思います。そもそも「風景」はただの自然物ではないのです。

山や小川や泉や沼は、原住民にとっては単なる美しい景色や興味ある景観にとどまるものではない……。それらはいずれも彼らの先祖の誰かが作り出したものなのである。自分を取り巻く景観の中に、彼は敬愛する不滅の存在「祖先」の功業を読みとる。これらの存在はいまも、ごく短期間、人間の形をとることができ、その多くを彼は父や祖父や兄弟や母や姉妹として直接的経験で知っている。その土地全体が彼にとっては、昔からあつて今も生きている一つの家系図のようなものである。(ストレーロウ・民俗学者 *qud. in* 真木二〇〇三、二四頁)

伝統社会にとって風景が破壊されるといふことの意味をあら

ためて考えてみる必要があるでしょう。わたし達にとってある一つの場所とか、人物とかが〈かけがえのないもの〉、つまり等価のないものと感じさせる感情の力を、私たちは近代化によってどんどん失っていったのかもしれない。

痛む記憶

記憶の問題に移っていきましょう。痛みの研究は近年飛躍的な成果が挙げられている分野です (Boddice 2017)。限られた時間ですので、今日は熊谷晋一郎先生というご自身が脳性まひ当事者で慢性疼痛に苦しんできた方の研究を参照します。熊谷氏は「当事者研究」という近年注目されている新領域の第一人者です。

基本的に人間には急性疼痛——腕をひねると痛むというような痛み——と、慢性疼痛——いわゆるクロニクルペイン——というものがあります。このクロニクルペインというのは、いまでも謎が多いものなのですが、氏の研究によると、もしかしたら記憶が関係しているのではないかということが言われています。「慢性疼痛というのは、組織にそういった構造的な原因がなくなつたにもかかわらず残ってしまう痛みのことである。そのメカニズムについては不明な点が多いが、大まかに言えば損傷や炎症からくる痛みの刺激が消失した後も、神経の中に「痛みの記憶」が残ってしまう状態のことである」(熊谷二〇一

三a、二二八頁)と。

たとえば夢であるとか、PTSDやトラウマによるフラッシュバックとかに関連するのですが、皆さんも夢で殴られた夢を見れば、実際には殴られていなくとも感覚的には痛みを感じますよね。熊谷氏によると「痛む記憶」とは、言うなれば起きながら夢を見るような感じだというわけです。慢性疼痛の状態というのは、ある意味で脳が「ここ痛め」という指示をだしている状態である。一方で、身体的には何の問題もない。医者にかかっても問題ありませんよと言われてしまう。結果として、薬をもらうわけですが、身体的には過剰投与になってしまっていて、長期的には健康を崩すといったケースも近年報告されています。

熊谷氏は、「痛む記憶」というと、精神的外傷のようなものを想像する場合が多いと思う。一般常識や日常性から大きく逸脱した体験は、十分に意味づけされることなく生々しい記憶のまま凍結保存され、いつまでも治らない古傷のように痛み続ける(同、二二九頁)と指摘します。この記述は逆に、痛みは意味づけされれば消える可能性がある、ということを示唆しているわけです。

その痕跡を傷と呼ぶならば、私たちは文字通り、傷だらけといってもよいだろう。この傷のうち、一定期間以上残り

続けて生命の軌道に影響を与えるものを、私たちは記憶と呼ぶのだ。だとすれば、傷/記憶だらけの私たちが、それでも日々痛まずに生きていけるといふ事実の方が不思議である。(同、二二九―三〇頁)

ある意味で、私たちは「傷」でできているという言い方をしています。自己と痛まない傷である、意味づけされた傷が凝固したものである、と。そういうふうにより自己をとらえ直したとき、では「回復」とは何だろうかと考えさせられます。復興のイメージの中心にある「回復」概念というものを、もしかしたら見直す必要があるのではないか。「痛み」を投薬や外科的に除去することは慎重に行わないと、自己を形成している「傷」までとり除いてしまい、当事者の性格や生の源泉までも破壊してしまう場合があるかもしれない。このように、傷と自己＝記憶というものがある意味で地続きなものとして見直すと、これまで見えなかった風景が見えてくるのではないか。

熊谷氏が「総当事者化」という言葉で強調するように、そもそも三・一一で私たちが経験したのは、すべての人が今まで想定した活動ができなくなるという社会的なディサビリティでした。電気が通じなくて電車やエレベーターが動かない、明日の見通しが立てられない、と。「安定した社会」というものに対する信頼や自信が大きく揺らぐ経験をした。程度の差は当然あ

りますが、被災の当事者性をスペクトラムとして見ると、私たちは大なり小なり皆当事者なのではないか、氏はそう言っています（熊谷二〇一三b、六二頁）。

これらの「痛み」へのサポートのあり方は、被災地支援を超えた形で普遍的な広がりをもっています。たとえば、アルコール依存症の方々が回復するためには医療だけではなく、AA（アルコホーリクス・アノニマス）のような自助グループの重要性が認知されてきました。ここでは「言いつばなし、聞きつばなし」というルールで、互いの話を共有していく活動があります。ほかにも困難な状況にある女性の集まりであるダルクや、先ほどの当事者研究など、さまざまな形で、人の話を価値判断的に聞くのではなく、受容的に分かち合う活動を通じて回復につながる当事者グループ的なコミュニティ——広義の「治療共同体、TC」——が、日本各地で今日盛り上がりを見せています（藤岡編二〇一九）。「痛み」を分類して当事者をカテゴリー（診断名）にふりわけけるのではなく、スペクトラムとしてとらえ直し、ゆるやかに連帯する。熊谷氏の痛みの理論はそういった可能性を示唆しているように思えます。

「被災者」という概念、「死者」という概念

そこで、ではどのようにこれまで復興過程において「被災者」と呼ばれてきた人びとを描写することができるのか。つま

り、「被災者／被災地」という概念化では、あまりに受動的な鑄型に当事者たちをおしこめてしまいます。さらに言うと、この「被災者」概念は、私の結論部分にもなってしまうのですが、「死者の記憶」や「死者の存在」というものを抑圧することで成立したのではないか。この場合の死者というものは、ある意味サバイバー（生還者）である被災当事者たちに「痛み」をもたらず、つまり、震災の記憶を想起させる象徴的な存在です。震災で亡くなった死者を思い出すことは、当時の不確実な世界を想起させます。その結果として、蓋をするように、なるべく死者というものを思い出さないほうがいい、忘れた方がいい、そういう支援の姿勢が定着しました。

その流れが行きついて反動的に現れたのが、「被災者」を無根拠にすぐ行動的な主体、未来志向で意志のある主体とみならず傾向です。例えば、経済特区だ、巨大防潮堤だというふうな、復興は単なる再生に止まらない成長戦略だと息巻く類のものです。そこには当然死者を悼む余白などありません。哲学者ハンナ・アレントによると、近代の特徴的な概念である「意志」(will) というものは文字通り未来志向的であって、過去との関係性を切断した形でどんどん前に行く傾向がある (Arendt 1971)。「意志ある主体」を獲得することと引き換えに死者との関係を断ってしまうというジレンマがここにあります。未来志向の被災者というイメージが押しつけられると、喪失の悲しみ

に打ち沈んでいる「被災者」は、いつまでたっても死者との関係が断ち切れない、つまり意志の弱い人間に責任主体をもたない存在という描かれ方がされてしまう。弱さと強さ、受動的と能動的、こういった対立的な被災者像が隠しているのは、死者の存在であると言えます。より長期的な視野から復興過程を構想したいのならば、これらに代わるものを提起してゆかねばなりません。

まだ仮説に過ぎませんが、そのヒントとしては、たとえば哲学者の國分功一郎さんが近年述べているような「中動態」という概念があります。古代にあった中動態を現在にあえて概念化することは、近代的な意志の概念から責任の概念を分けるといふやつかいな作業をとまいません。ひとつ言えることは、人間の責任主体 (responsibility) とは、広い意味での応答 (response) によって構成されているということです。そのよきな責任主体に、究極的な他者である死者への応答も含意されているとしたらどうだろうか。「傷」は外部の他者によってもたらされるものですが、その傷から回復するきっかけをもたらすのもまた同じ他者です (熊谷二〇二三b、一九四―五頁)。究極的な他者としての死者の存在は、人間が責任をもって生きるための究極的な応答対象として立ち現れる。死者の存在を媒介することによって「痛み」の意味が決定的に変化するのです。

「死ぬ場所」としてのふるさと

最後にこの死者への応答という部分にふれながら終わりにしたいと思います。神戸の震災とは異なり、東日本大震災の被災地では、メディアを中心に「被災地の幽霊」の話題が頻繁にとりあげられました。ロイターやAFPなどの海外メディアから、心霊ものは避ける傾向のあるNHKスペシャルでもとりあげるほどでした。とくに注目をあびたのは、東北学院大学教授の金菱清先生の研究です。金菱ゼミの学生の一人が、地元のタクシードライバーに聞き取り調査を行ない、その論文が話題になりました (金菱編二〇一六)。被災地の幽霊を取材したジャーナリストの奥野修司氏の本に印象深い一節があります。

「聞かされた霊体験の話は」切ない話だったが、それを聞いてほっとすると同時に、思わず胸が高鳴った。これまで霊を見て怖がっているとばかり思っていたのに、家族や恋人といった大切な人の霊は怖いどころか、それと逢えることを望んでいる。この人たちにとって此岸と彼岸にはたいして差がないのだ。たとえ死者であっても、大切な人と再会できて怖いと思う人はいない。むしろ、深い悲しみの中で体験する亡き人との再会は、遺された人に安らぎや希望、そして喜びを与えてくれるのだろう。(奥野二〇一七、

ほかにも、亡き人と話したいという人びとが訪れる「風の電話」や亡くなった家族や知人に手紙を書くための「漂流ポスト」というものもあり、映画化までされています。辛いはずの死者の記憶と自ら向き合おうとする被災当事者の姿は、行政や傍観者が理解しがたいものなかもしれません。しかし、このような遺族たちの心の回復の過程は、死者との「続いてゆく絆」(Continuing Bonds) という近年注目されている概念に通ずるところがあります。この「続いてゆく絆」とは何かというと、今までフロイトの理論等で、死者との絆は一日でも早く断ったほうがいい、忘れたほうがいいと、そうしないと回復できないと言われてきたものが、むしろ亡くなった死者との関係性というものを続けたほうが心の回復によいという結果が報告されています (Klass 1996)。

これらの研究成果と整合する証言が今回の震災でもかなり出てきている。それはある意味で、自分のアイデンティティというものを死者との関係のなかで紡いで、生きる希望というものにつなげていく事例が多い。一番有名なものですと、福島原発事故で避難を余儀なくされて横浜市に避難した生徒、彼は避難先で過酷ないじめにあいます。公開手記にこうあります。

ばいきんあつかいされて、ほうしゃのうだとおもっていつもつらかった。福島の人はいじめられるとおもった。なに

もていこうでできなかった。／いままでいろんなはなしをしてきたけど(学校は)しんようしてくれなかった。なんかいもせんせいに言おうとするとむしされてた。／いままでなんかいも死のうとおもった。「…」でも、しんさいでいっぱい死んだからつらいけどぼくはいきるときめた。(日本経済新聞、二〇一六年一月一六日付)

すなわち生徒の存在を支えたのは、教師や心理カウンセラーでもなく、そういう震災で亡くなった人たちの存在でした。過酷ないじめをのりこえるため、自己のアイデンティティをサバイバー(生還者)として立ち上げたんですね。ここには単なる死者に対する「ギルト(罪悪感)」を超えた「応答」を垣間見ることができます。ほかの証言にも、自分は母親の形見の品がすべて流され、ひとつも残らなかった。でもある日気づいた。自分自身がもしかしたら母の形見なんじゃないかと。そうしたら生きる気持ちが生まれた、と。そういう証言もあります(徳永二〇一八、一八二頁)。このように死者との関係性を丁寧に取り出すことで、復興過程というものがより豊かに構想できるのではないか、これが私の結論になってきます。

以上をふまえた「ふるさと」のあり方ですが、巨防潮堤建設が前提とする人間観というものは、生命至上主義というか、生きるということが死からできるだけ離れることであるという

理解を暗に示しています。ですが、そもそもふるさととは生きる場所であると同時に、死ぬ場所でもあるから「帰る場所」たりえるわけです。単純化を恐れずに言えば、ふるさととは終の住処やお墓がある場所であると言ってもいいかもしれません。その意味で、「絶対安全なふるさと」というのはちょっとした語義矛盾なんです。死ぬ場所としての住処のあり方に思いを馳せながら復興過程というものを構想すれば、被災者の支援も死者との関係性を含んだものになっていたかもしれません。それはもしかしたら町づくりにおける自然の内部化であるとか、景観における海の内部化であるとか、そういう部分につながり、やがて傷ついた被災者たちが言葉を取り戻すことができるのではないか。以上の考察はまだ「長期の時間」が含意するもの的一部ですが、今日はこの辺で終わりとさせていただきます。ありがとうございました。

引用文献

- 奥野修司『魂でもいいから、そばにいて…3・11の霊体験を聞く』新潮社、二〇一七年
- 金菱清編『呼び覚まされる霊性の震災学…3・11生と死のはざままで』新曜社、二〇一六年
- 金菱清編『悲愛…あの日のあなたへ手紙をつづる』新曜社、二〇一七年
- ガブリエル、マルクス『未来への大分岐』集英社新書、二〇一九年

熊谷晋一郎「痛みから始める当事者研究」石原孝二編『当事者研究の研究』医学書院、二〇一三年 a

熊谷晋一郎『ひとりて苦しまないための「痛みの哲学」』青土社、二〇一三年 b

Klass, Dennis, et al. eds. *Continuing Bonds: New Understandings of Grief*. London: Routledge, 1996

國分弘一郎『中動態の世界…意志と責任の考古学』医学書院、二〇一七年

徳永博志『震災と向き合う子どもたち』新日本出版社、二〇一八年

日本経済新聞「はい菌抜いたら良かった」震災避難の生徒が手記」(二〇一六年一月一六日 日経電子版) <<https://www.nikkei.com/article/DGXIASDGI5HEM1W6A11C1CR0000>> (アクセス日: 二〇二一年一月八日)

花田太平「大震災と死者の政治学」『麗澤レビュー』二三巻『麗澤大学英米文化研究会、二〇一七年

藤岡淳子編著『治癒共同体実践ガイド…トラウマティックな共同体から回復の共同体へ』金剛出版、二〇一九年

ブローデル、F『地中海Ⅴ…出来事、政治、人間Ⅱ』浜名優美訳、藤原書店、二〇〇四年

Boddie, Rob. *Pain: A Very Short Introduction*. London: Oxford UP, 2017

真木悠介『時間の比較社会学』岩波現代文庫、二〇〇三年

山下祐介『復興』が奪う地域の未来』岩浪書店、二〇一七年